

令和七年 五月二十五日

青鳳会講師 吉野 久

■睡眠

素問・五藏生成第十

人臥、血歸於肝。

人、臥せば、血は肝に歸る。

人が寝ている間、血液は肝臓に帰っている。

・素問の「五藏生成篇」に見られる記述である。古代に於ける観察であるが、このような正鵠を得た観察に驚かされる。

人が寝ている間、血液が肝臓に帰っていると考えるなら、人間の睡眠各期は次のように考えられるだろう。

- ① 寝付きが悪い⇒肝に血液が治まらない⇒肝の治療が必要である
- ② 睡眠中めざめる⇒身体の他所に異常があるために睡眠が中断される⇒以上箇所の治療が必要
- ③ 夜間を通して眠れない⇒眠る力の不足⇒陰を補う治療が必要

■素問靈枢当時の精神病と鍼治療

靈樞 癲狂第二十二

●喜忘苦、怒善恐者得之憂饑。治之取手太陰陽明、血變而止、及取足太陰陽明。

喜べば苦を忘れ、怒つて善ばしば恐れる者は、之を饑を憂うに得る。之を治すに、手の太陰陽明を取り、血、變ずれば止め、及んで取足の太陰陽明を取る。喜ぶと苦しみを忘れ、怒ったあげくしばしば恐れる者は、飢えを憂うるあまりそうなのである。治療には、手の太陰經と陽明經を瀉血し、黒い血の色が赤くなったところで止め

る。その次に足の太陰經、陽明經を瀉血する。

- ・ 飢餓に追い詰められると、怒ったり、恐れたりという躁状態になることがある
- ・ 靈樞・九鍼論⁷⁸に、太陰は多氣少血であり、陽明は多氣多血であるという記述がある。

● 狂言驚、善笑好歌樂妄行不休者、得之大恐。治之取手陽明太陽太陰。

狂ふとは驚くを言ひ、よく笑ひ、歌樂を好み、妄らに行(めぐ)りて、休まざる者は、之を大恐に得る。之を治すに、手の陽明、太陽、太陰を取る。

狂うとは驚きの劇烈なもので、よく笑い、歌樂を好み、いたずらに出歩いて、休むことを知らない者は、恐れすぎた結果、こうなったのである。治療には、手の陽明、太陽、太陰の各經を瀉血する。

- ・ 非常な恐れから、躁状態になる。

● 狂目妄見、耳妄聞、善呼者、少氣之所生也。治之取手太陽太陰陽明、足太陰、頭兩頤。

狂ひて目に妄りに見、耳に妄りに聞き、善く呼ばはる者は、少氣の生ずる所也。之を治すに手の太陽、太陰、陽明、足の太陰、頭の兩頤^{カン} 顎の左右兩側(えら)を取る。

狂つて幻視・幻聴が起り、よく大声で呼ばわる者は、氣の消耗のなせる病である。治療には手の太陽、太陰、陽明、足の太陰の各經、および頭の両のえら(頰車穴)より瀉血する。

- ・ 少氣して(氣が消耗して)、幻視、幻聴が起る。

● 狂者多食善見鬼神、善笑而不發干外者得之有所大喜。治之取足太陰太陽陽明、後取太陰太陽陽明。

狂へば多食し、善ばしば鬼神を見る。善く笑へども外に發せざる者は、之を大ひに喜ぶ所を有(うる)に得たり。之を治すに、足の太陰、太陽、陽明を取り、後に太陰、太陽、陽明を取る。

狂うと過食し、しばしば鬼神を見るようになる。ニヤニヤ笑いをする者は、喜びすぎた結果である。治療には、足の太陰、太陽、陽明から瀉血し、その後、手の太陰、太陽、陽明より瀉血する。

・喜びすぎると、過食、幻視があり、ニヤニヤ笑いするようになる。

いずれも、現代に較べて症状の出方が激烈である。これが書かれた古代中国の春秋戦国時代は、中国各地方に都市国家が群生し、その狭い街（＝国家）の中で民がひしめき合い、始終、紛争・戦争が繰り返された時代であった。

■感情の乱れと動悸・心痛

靈樞・五邪第二十

●邪在心則病心痛、喜悲、時眩仆。視有餘不足而調之其輸也。

邪、心に在れば、則ち心痛を病む。喜悲し、時に眩仆す。有餘不足を視、これをその輸（井榮輸經合穴※）に調ふなり。

邪氣が心臓にある場合、心臓に痛みを覚える。喜び悲しみ、時に目が眩んで倒れる。氣の有餘不足を診て、その井榮輸經合穴より補寫して調える。

※靈・邪氣藏府病形第四・二節

黃帝曰く、榮輸（井榮輸經合の五行穴）は合（下合穴）と與よに、各々名、有るか。

岐伯答へて曰く、榮輸（井榮輸經合の五行穴）は外經を治し、合（下合穴）は内府を治すなり。

●靈樞・官鍼第七

一を輸刺と曰ひ、諸經榮の輸（井榮輸經合の五行穴）、藏輸（背部俞穴）を刺す也。

張介賓「諸經榮の輸とは、凡そ井榮經合の類、皆な腧なり。藏腧とは、背間の藏府の腧なり」

●素問・痺論第四十三

五藏有俞、六府有合、循脈之分、各有所發。

五藏に俞(背部俞穴)、有り、六府に合(下合穴)、有り、脈の分を循りて、各々發する所、有り。

●素問・痿論第四十四

各補其榮而通其俞、調其虛實、和其逆順。

各々其の榮(井榮輸經合の五行穴)を補ひ、其の俞(背部俞穴)を通じて、其の虛實を調へ、其の逆順を和す。

「靈樞・九鍼十二原」で、手足の四大關節に十二原穴を認め、それを以て氣を補寫する治療が提唱されたが、「邪氣藏府病形」「官鍼」においては、さらに前腕と下腿に五行穴を認めるまでに經穴論が進み、氣を補寫する治療も進んだのである。また下肢に府を治療する合穴、背部に藏を治療する俞穴をも認めるようになった。

素問の中程にある(といっても、ここに配置したのは王冰だが)「痺論第四十三」「痿論第四十四」では、右の靈樞の經穴論にそった治療法が説かれている。

また、ここには互文見義の修辭も見られる。すなわち「各補其榮而通其俞、調其虛實、和其逆順」の中の「補」は「其榮」に掛ると同時に「其俞」にも掛る。「通」は「其俞」に掛ると同時に「其榮」にも掛るのである。同様に「調」は「虚實」も「逆順」も調えるのであり、「和」は「逆順」も「虚實」も和することを表す修辭となっている。

靈樞・口問第二十八

●黄帝曰人之太息者何氣使然。歧伯曰憂思則心系急、心系急則氣道約、約則不利、故太息以伸出之。補手少陰心主、足少陽、留之也。

黄帝曰く人の太息するは、何の氣か然らしむ。歧伯曰く憂思すれば則ち心系、急す、心系、急すれば則ち氣道、約す、約すれば則ち利せざるなり。故に太息して、以てこれを伸出す。手の少陰心主、足少陽を補ひ、留むる（鍼を留めておく）なり。

黄帝が言うには、人が大きくため息をつくのは、何の氣が原因なのか、と。歧伯が答えて言うには、憂れえて思いが募れば、心臓の周りが引き攣れますが、そうなると氣道が絞扼せられ、通じなくなります。よって大きく息を吐いて、伸すのです。手の少陰心包、足の少陽を補うため、鍼を留めておきます。

■道德と皮肉 …… 戦国時代の都市国家が群れ集まり、常に摩擦を起し合っているので、

世相が不安定で、常に騒然としている。また国Ⅱ都市が狭いので、人の間も狭く、非道德的な世間になりがちとなる。このため道德が強く標榜される。その半面、皮肉が盛んに人口に膾炙した。このような皮肉な目を以て現代を眺めると、現代文明の病理がすでに映し出されており、空恐ろしさを覚えるのは私だけであろうか。

千人の指さすところ、病なくして死す 漢書〕 Social Networking Service 禍

衆口金を鑠^とかす 国語・周語下〕 SNS 禍

春秋に義戦なし 孟子・人心下〕

寝^みぬるに尸^しせず 論語・郷党〕

父母在ませば、遠く遊ばず。父母の年は、知らざるべからず。 論語・理仁〕

人の患^{うれ}ひは、好んで人の師となるにあり。 孟子・離婁上〕

機械有れば、必ず機事有り、機事有れば、必ず機心有り 〔莊子・天地〕

強ひて仁義繩墨の言をもつて暴人の前に述ぶるは、これ人の惡をもつてその美を有^うるなり。 〔莊子・人間世〕

一面の唾は、三面の涎なり。 齊藤緑雨(1868～1904)

身体髪膚これを父母に受く。敢えて毀傷せざるは、孝の始めなり。身を立て、名を後世に揚げ、以て父母を顕はすは孝の終りなり。それ孝は親に事ふるに始まり、君に事ふるに中^{なか}し、身を立つるに終る。 〔孝経〕

衛の懿^い公、鶴を好み、鶴も乗軒を有すれば、將に戦はんとするとき、國人、甲を受くる者は皆曰く、鶴にせ使めんと。鶴や實に禄位あるに、余^{いづれ}焉ぞ能く戦はん。

〔春秋左氏傳・閔公二年〕